

喰らう喰らう女を喰らう。

喰らう喰らう隙間を喰らう。

喰らう喰らう時間を喰らう。

喰らう喰らうお前を喰らう。

私を喰らうのは誰だ。

お前はどこで私を喰らうのだ。

寝室か、浴室か、公衆トイレの中から、電話ボックスの中から。

命をかけて馬鹿をみる。

現実を見て虚無をみる。

喰らう喰らう喰らうのは誰だ。

どこのどいつだ。お前か、私か。

テレビを消す男 女、お茶と御飯を持って登場
ノック テレビを消す男

女 はい、どうぞ

男 ああ、うん。

女 どうかした。

男 いや、何でも。

御飯をかき込む男

女 もっと味わって食べたら。

男 これがうまいんだろ。

女 そうかな。

男 そうだよ。

女 いつもそういって…。もう、そんなに嘔まないでいたら

間

女 そんなに嘔まないでいたら…

女 喉、つめますよ。

男 ……!

女 どうしたの。

男 何だって。

女 何が。

男 だから何だって。

女 だから何が。

男 だから今、なんて言ったのかを俺は聞いているんだ。

女 …え。 だから、こういったのよ。

男女 喉、つめますよ。

女 テレビでもつけますか。

男 だめだ。

女 どうして。楽しいじゃない、テレビ。

男 楽しくなんかないさ。

女 楽しいわよ。ほら、こないだなんてね…

男 見なくていい。

女 え。

男 見る必要が無いだろ。

女 でも…せっかくここにあるんだし。何かほら、楽しいことがあるかも…

男 無い。いいか、だめなんだ。テレビというものはあれだ。どうもいかん。あれはああやって、民衆の心理の裏を操作している。大衆心理だよ。マスメディアによって操られているということに、まだ気づかないのか。

女 難しいこと言ったってわかんないわ。そうね、では辞めておきましょう。」

片付ける女

男 そんなことより…

女 何。

男 …来たのか。

女 何が。

男 あれだよ。

女 あれって何。

男 例の…あの…その…

女 何ですか、はっきり言えばいいでしょう。

男 あの…あれだ、赤くて大きくて、こう…どろどろっとして…

女 ああ…あれね。来ていますよ。

男 …そうか。

女 まあ、いいじゃない。こればかりは。授かりものなんだから。

男 そうだな。

女 そうですよ。

男 いいさ。

女 そうね。

男 いいんだ。

女 だから、そうね。

男 どうしてもって時はまた言うよ。

女 そうですね。おっしゃってください。

男 ああ、そうするよ。…最近、どうもだめだ。歳かな。いや違うな…。なんだかこう…。味が無いんだ。

女 御飯の。

男 違うよ。味が無いというか、色が無いというか。無味無臭…いや、違うな。

女 また次の思想ですか。

男 いや、まあ…そんな所だ。

女 どうぞ、存分に、お考えになってください。

男 ああ。

間

女 出て行きますか。

男 え。

女 いや、貴方が。私じゃなくて。…出て行かれますか。行き詰ったとき、皆そうするでしょう。

普通。

男 いや。

女 しますよ。川原を歩くとか、公園のベンチで本を読むとか。風にあたるとか、夕陽を眺めるとか。

男 いや、しない。

女 あなたはね。あなたの、この部分はね。だけど貴方の身体はきつと、いいえ必ず、ふらふらと川原を散歩したり、道路で猫と遊んだり、星を眺めたり、公園に行ったり、公園で犬の糞をふんずけたり、その犬の糞のついた靴を洗い流そうとして川で転んでずぶぬれになったり…

男 そんな、空想の中で俺をだめな男にするなよ。

女 逆かもしれないわ。そうだわ、もしかしたら逆なのかも知れない。あなたの身体は確かにこの部屋にいるけれど、確かにいつでもいつまでもずっとその部屋

男 にいるけれど、その心は、この部分は、遠い山奥で山賊にあったり、山姥が出てきて…
男 いい加減にしないか。

女 ふふ。

男 なんだよ、山姥って。なんだよ、山姥って。

女 じゃあ、海賊。

男 海賊は…山にはいないだろ。

女 そうね。

男 ははは。

女 ははは。

間

男 なあ。

女 なんですか。

男 もう、やめにしないか。

女 なにを。

男 なにをって…こういうのをだよ。

女 はい。

男 こういうことを、もうやめにしようって行ってんだ。

女 …何をいつているのか、見当がつかないわ。

男 とぼけるなよ。

女 とぼけてなんていないでしょ。

男 とぼけるなって言っているんだ。

女 …

男 …ごめんごめん。びっくりしちゃったな。

女 …

男 だから、そういう態度を辞めろと言っているんだ。なんなんだ一体。さつきから。どうしちゃったんだ。ちよっとおかしいぞお前。いいかげんにしてくれよ。痛むんだよここが。ここだよここ。目の裏の頭の中の俺の喉元に繋がっているここが、お前のせいで、物凄い勢いで痛むんだよ。

女 …。

女 体調でも悪いの。
男 いや。

ゆつくりと食し始める男

男 テレビでもつけるか。

女 だめよ。

男 どうして。

女 だめ。だめよ、あれは。テレビってほら、皆お芝居じゃない。

笑顔も芝居、涙も芝居。そうでしょ、ね。あんなもの見たら頭がおかしくなっちゃうわ。

男 …。

女 いい。だから、いけないの。ね、辞めておきましょう。

明かりがつきかける

男 …なあ。

女 なに。

男 …。

女 …終わったわよ。

男 …じゃあ。

女 どうしてもって時はおっしゃってください。

男 ……どうしてもだ。

セックス 動き

男は真剣 女はケラケラ笑っている。

男、苦しきのあまり抵抗するが、逃れられない。

一気に暗転

一気に明転

女は居ない。先ほどと同じように肩で息をする男。
先ほどと違うこと。食べかけの白米が残っている。

必死で御飯を流し込む男。と同時に奥で女の声がある。

女 喰らう喰らう女を喰らう。

喰らう喰らう隙間を喰らう。

喰らう喰らう時間を喰らう。

喰らう喰らうお前を喰らう。

私を喰らうのは誰だ。

お前はどこで私を喰らうのだ。

寝室か、浴室か、公衆トイレの中か、電話ボックスの中か。

命をかけて馬鹿をみろ。

現実を見て虚無をみろ。

喰らう喰らう喰らうのは誰だ。

どこのどいつだ。お前か、私か。

台所の音(だんだん大きくなる)

男 …部屋だ。

壁だ。

床だ。

床に耳をあてる男

必死に床や壁を押し返そうとする男。

男 だめだ。この部屋に二人は入れない。

さつきよりまた近くでノック

男 だめだ。

女 え。

男 だめだ。

女 ねえ。

扉を開けようとする女。押さえる男。

女 ねえ、何。どうしたの。

男 ここは、だめなんだ。

女 何故。何か見られるとまずいものでもあるの。

男 そうじゃない。

女 じゃあなに。

男 だめなんだ。

女 入れてよ。

男 お前、言ったら。

女 何が。

男 入れないんだよ。

女 何が。

男 とぼけるな

手を離す

間

女 …ねえ。

男 …。

女 …聞いている。

男 …。

女 …聞いているよ。

男 聞いているよ。

女 ねえ…変よこんなの。普通じゃない。

男 ここを開けて。

男 それは、出来ない。

女 何があつたの。話をして。

男 もう、遅い。

女 遅いなんてことないわ。

男 遅いんだよ。

女 分かった。私が悪かった。あなたの気持ち、考えていなかったかも知れない。…そうね、そうかもしれないわ。ねえ、どうしたらいい。

男 ほんの少しでいいんだ。ほんの少しだけ、勇気を出してくれ。

女 ええ、分かったわ。そうする。出すわ、勇気。

男 …。

女 ねえ。

男 出すんだな。

女 うん。

男 分かった。

女 うん。

男 うん。

女 うん。

男 うん。…じゃあ。

女 何。

男 お前が入ってくれ、この部屋に。俺…私の代わりに、この部屋で…考えてくれ。

女 うん。

男 うん。

ゆつくりと、扉を開ける男。入れ替わる二人。

男、もう随分と小さくなっていく部屋から出る。女、入る。

女、ゆつくりと考え出す。苦悩は女の中に入っていく。

男 なあ、そこから何が見える。何も無いその部屋から、何が見える。そこに窓はあるか、出口はあるか。なあ、その中から何が見える。なあ。

女 なあ、じゃあ聞くが、お前の目には何が見えていた。何にも見えちゃいねえじゃねえか。ここん中に閉じこもってお前は、食うもんだけ食って生きているだけじゃねえか。

男 この米粒一つの生に値する程も、お前は何も見えてなかったじゃねえか。

喰らう喰らう女を喰らう。

喰らう喰らう隙間を喰らう。

喰らう喰らう時間を喰らう。

喰らう喰らうお前を喰らう。

私を喰らうのは誰だ。

お前はどこで私を喰らうのだ。

寝室か、浴室か、公衆トイレの中か、電話ボックスの中か。

命をかけて馬鹿をみろ。

現実を見て虚無をみろ。

喰らう喰らう喰らうのは誰だ。

どこのどいつだ。お前か、私か。

女 苦しみの余り崩れ落ちる。

ゆつくりと入ってくる男。手にはフランスパン。
男、フランスパンを置き、女を支え、立たせる。

間

女 つけましよう。テレビ。

男 …。

女 つけましようよ。ね。

男 ああ…うん、そうだな。そうだよな。

女 そうですよ。だって、だってここにテレビがあるんですから。

男 そうだよな。

女 使わない手はないんです。

男 使わない手はないよな。

男、テレビをつけようとする。

女 考えました、私。貴方は変化を恐れている。世の中は毎日変化していつているわ。私たちだけここに留まっておくことなんて出来ない。かわらないものなんてない。私も、貴方自身も。貴方はそれを認めようとしていないだけ。今はちよつとそのスピードが速すぎるだけよ。すぐについていけないようになるわ。大丈夫。情報から目をそらしちゃいけないの。そうでしょ。

世の中はすごい勢いで動いているわ。そりゃ、誰だって最初は戸惑ったはずよ、私だってそう。だけど、もう終わったの。

だから、次へ進まなくちゃいけない。決して暗くなることなんてないわ。これは、大きな一歩なのよ。皆変わっていくの。もちろん、老いていくの。生まれて、老いて、そのうち体にガタがきて、病氣かなんかになって死んでいくわ。

とどまるなんてことは無理よ。ここに命がある限り、ね。これはとても意味のある事なのよ。あなたにとって、ううん、私たちにとって。もちろん、この世の中になってもね。

男、向き直る。

女 変化を恐れちゃいけないの。動こうとしなくたって、あなたは動いているんだから。(台詞と同時に男にフランスパンを渡す。)

女の言葉を受け入れるかのように、女を抱きしめる

女 そうよ。変わらないものなんてないのだから。皆は変化を喜んでいる。どんどん大きくなっていくこの国を、この世の中を、きっと皆は喜んでいるのよ。
フランスパン、女

女 世の中なんて、いつもお祭り騒ぎよ。だけど、それを嫌っちゃいけないの。貴方なりに、ついていかなかちや。ね。

ゆっくりとフランスパンを噛み千切る男

崩れ落ちる女

女の亡骸に見向きもせず、咀嚼する。

ただ、咀嚼。

変わらない。何も変わらない。

明かりは暗くなり、また明るくなる。

咀嚼を続ける男。

床には女の亡骸、そして御飯。

変わらない。何も変わらないのだ。

暗転

明転

まだ咀嚼を続ける男

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権は せんすおぶわんだあ に帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens_of_wonder